

P3-34 腫瘍融解症候群 (TLS) を認めた子宮横紋筋肉腫の1例日本医大¹, 葛飾赤十字産院²平泉良枝¹, 印出佑介², 小野修一¹, 山下恵理子¹, 菊池美美², 朝倉禎史¹, 山田 隆¹, 五十嵐健治¹, 黒瀬圭輔¹, 渡辺美千明¹, 鴨井青龍¹, 竹下俊行¹

腫瘍融解症候群 (TLS) は, 抗癌治療によって, 大量の癌細胞が短期間で崩壊し, 癌細胞中の核酸が尿酸へ代謝されることで惹起される病態である。主に白血病の治療中に経験されるのに対して, 婦人科領域で経験されることは稀であり, 肉腫に見られた報告はない。今回, 子宮横紋筋肉腫の治療中に TLS を発症したと考えられたので, 報告したい。症例は 36 歳, 未妊妊婦。下腹部痛を主訴に来院。初診時, 腹腔内全体を占拠する子宮腫瘍と同時に, 両下肢の著名な浮腫, 両側の水腎症および多発肺転移を認めた。全身状態は非常に悪化しており, 子宮より腔内に脱出したポリープ様の組織片をもって横紋筋肉腫と最終診断した。治療は, 両側に尿管ステントを留置後, 半量投与の VAC 療法で開始した。腹腔内の腫瘍や肺転移巣の著明な縮小に伴い, 体重は 13kg 軽減した。腎機能は改善し, 治療の継続を図ったが, 2 コース目の途中で, 乏尿をきたして急性腎不全となり, 意識レベルが低下した。本症例の病態として TLS を疑って, 輸液を行った。最終的には血液透析により急性期を脱した。TLS 発症予知因子として化学療法前に高 LDH 血症, 高尿酸血症, 高窒素血症があり, 治療後の因子としては前述の 3 項目に加え, 高カリウム血症, 低カルシウム血症, 代謝性アシドーシスが挙げられるが, 本症例は全てにおいて認められた。以後, 大量の補液とともに化療を継続した。その後, さらなる腫瘍減量を目的として, 子宮および転移リンパ節と考えられた後腹膜腫瘍の摘出や転移性腫瘍の胸腔鏡下部分切除を行った。現在, 発病より 1 年 6 ヶ月になるが現在の PS はよく, 外来と入院を繰り返しながら TC 療法を始め, 腫瘍減量を試みている。

P3-35 Leiomyosarcoma of the Uterus with Osteoclast like Giant Cells の1例

県立宮崎病院

蜂須賀正紘, 今村紘子, 高村一紘, 阿満 紫, 一戸晶元, 尼田 覚, 嶋本富博

Leiomyosarcoma of the Uterus with Osteoclast like Giant Cells (以下 LMS with OLGC) は現在まで 6 例の報告しかなく, 極めて予後不良とされる。報告は大半が閉経後の症例であるが, 今回我々は閉経前に発症し, 急な病状の進行を認めた LMS with OLGC の 1 例を経験したので報告する。症例は 45 歳。2 経妊 2 経産。下腹部膨隆感と下腹部痛を訴え, 前医を受診し, 径 11cm の内部不均一な子宮腫瘍を指摘され, 当科を紹介受診した。内診にて子宮体部腫瘍は可動性が不良で, 胸部単純 X 線撮影, 腹部 CT 検査で子宮外病変は認めなかったが, 血液検査で LDH が 360 IU/l, CA125 が 57.0 IU/ml と高値を示し, 子宮肉腫を疑い, 開腹術を施行した。開腹時に, 大網及び子宮周囲に高度の癒着を認め, 子宮底部右側に新生児頭大の腫瘍があり, 表面は破綻していた。術中迅速病理組織診断を施行し sarcoma の結果であったため, 腹式単純子宮全摘出術, 両側付属器摘出術, 骨盤内腫瘍摘出術, 大網切除術, 小腸部分切除術を施行した。術後病理組織診断にて, LMS with OLGC の結果で, 子宮肉腫 3a 期 (pT3aNXMX) と診断した。術後にイホスファミド, ドキソルビシン併用化学療法 (TI 療法) を施行したが無効で, 術後 4 ヶ月で死亡した。OLGC は CD68 陽性で組織球由来と考えられる細胞で, その存在意義は未だ不明であるが, LMS with OLGC は LMS の中でも特に予後が不良なタイプであると考えられた。

P3-36 子宮体部癌肉腫における Cited-1 の発現の検討大阪大¹, 大阪府立成人病センター²連 美穂¹, 榎本隆之¹, 上田 豊¹, 宮武 崇¹, 高田友美¹, 松崎慎哉¹, 横山拓平¹, 藤田征巳¹, 吉野 潔², 木村 正¹

【目的】子宮体部に発生する癌肉腫は治療抵抗性であることが多く, 高齢化に伴って今後増加することが予想される。これらの腫瘍細胞の一部は上皮細胞に特徴的な接着能を喪失して浸潤・転移能を獲得し, さらに抗癌剤などに対する抵抗性を有することから, 間葉細胞としての性格, tumor stem cell 様の性質を有していると考えられる。そこで当研究は, 間葉-上皮転換 MET (Mesenchymal Epithelial Transition) を阻害する転写因子 Cited-1 のこれらの腫瘍発生・進展における関与を検討することを目的とした。【方法】子宮体部癌肉腫 10 症例 (1 期: 6 症例, 3 期: 4 症例) における Cited-1 の発現を免疫組織染色で解析し, その発現と臨床病理学的事項及び予後との相関を検討した。【成績】10 症例中 6 症例 (60%) で Cited-1 免疫組織染色陽性であった。Cited-1 陽性の癌肉腫において, 癌領域のほうが肉腫領域にくらべ, 有意に Cited-1 が発現していた。Cited-1 の発現と臨床病理学的事項および予後との有意な相関は見出せなかった。【結論】子宮体部癌肉腫の発生に Cited-1 が関与していることが示唆された。今後, 症例を増やして予後との相関を調べるとともに, Cited-1 阻害による腫瘍細胞制御の可能性を検討する。